

祈願と忘却がからみあい今の音が抑えつける
それは簡単なではない

何を手放せば それを繰り返すせば
それが叶うのだろうか？

低い意識の中でもそれは零れ堕ちる それだけの強さ
不愉快な心の要が燃え堕ちるのさえ誇らしい

あなたの投げた捨てた祈りさえまぶし過ぎて

今は足元さえ見えはしない たとえ正しいとしても

あなたが揺らぐことはありません

たとえ平坦だとしても たとえそれが無いとしても

それが無いならば それしかないのならば…

いくつもの事柄が脳の感覚を麻痺させる

もはや正気は遠い記憶の彼方

どうか、それに気がつかないでください

今更浄化することさえ考えられない

それが終わることなど信じられるはずもない

あなたの投げた捨てた祈りさえまぶし過ぎて

今は足元さえ見えはしない たとえ正しいとしても

あなたが揺らぐことはありません

たとえ平坦だとしても たとえそれが無いとしても

それが無いならば それしかないのならば…

低い意識の中でもそれは零れ堕ちる それだけの強さ

何もない声 見えない世界 あなたの笑顔

たとえ両手がすくい上げたとしても

すくい上げたとしても

悲鳴は誰にかき消される

あなたの投げた捨てた祈りさえまぶし過ぎて

今は足元さえ見えはしない たとえ正しいとしても

あなたが揺らぐことはありません

たとえ平坦だとしても たとえそれが無いとしても

それが無いならば れしかないのならば…

限りある程華やかに 彩って見せよう

そして、この手で崩してあげよう

ありったけの花で飾って飾って

あなたの微笑みに何度も何度も凍りつく

もしも正しいならば

たとえそれが無いとしても

たとえそれが無いとしても

あなたに鳴り響くこの音がまたここを揺らし続けるから

こんなにも、自分の血が沸騰する音を自分は聞いたことが無かった。

指先からつま先まで、全ての血液がグツグツと煮え立つ音。体の芯まで自分が熱くなれる。

そんな時が来るとは思ってもみなかった。

それも、ただ、一人の人間に対して。

「政宗、どこに行く。」

「An?どこだっつていいだろ。俺の勝手だ。」

いつも繰り返えされる伊達家の親子のやりとりだ。

生来、陰気だった政宗が家臣、片倉小十郎の教育の賜物かここまでモノになったのは父、輝宗からは嬉しい誤算のはずだった。

故に十七の政宗に家督を譲り自分は隠居することができた。しかし、その性格の変わりようたるや、真反対の性格に輝宗も少々手を焼いていた。

今日のように、急に姿を消すことが間々あった。ここ一年それが顕著になっている。

以前は姿を消すといってもほんの数刻だったが、近頃はそれが数日にも渡る時すらあった。

政に影響が出ないような手漉きの時にフラリといなくなる

ので政務にはさして支障をきたしてはいない。

そして、いなくなる数日前から政宗は普段の倍以上の速さで政務を何日か分早く済ませる傾向があった。

此度も四日ほど前からその兆候がみられたので、父、輝宗はまた政宗がいなくなるだろうとはっていた。

「お前は当主の自覚がないのか。フラフラと出歩いたりして。」

「自覚があるから、心配かけねえようにこっそり出るんだろがよ。テメエが騒ぎ立てるから台無しじゃねえか。」

それでも振り切る政宗に輝宗は何とか引きとめようと言葉を投げ続けた。

「どこに行く。」

「どこだっつていいだろ。」

「甲斐か。」

「……テメ。」

甲斐の二文字に政宗の足が張り付いた。

政宗が先日武田との戦の時に先駆けをしていた真田幸村と試合したことは聞き及んでいた。

その勝負は引き分けに終わったが、それからの政宗は明らかに浮き足立っていた。

浮き足立って、獲物を狩る目をする。

一武将としてならばそれでよい。だが、政宗は一国の主だ。

主が主である事を忘れてしまえば民は路頭に迷う。

「畠山の件もまだ片付いていないだろう。」